

社会学「近代とは何か」
メディアスクーリング

担当 徐玄九

5 歴史区分としての「近代」

【History】歴史・物語

- ①ギリシャ語の語源(*istoria*;歴史、由緒、物語⇒知の探究)から発展して「知識の叙述」という意味で用いられる。
- ②語源から英語にいたるまで、どれも出来事の「物語(story)」から過去の出来事の話に及ぶ幅広い意味を備えていた。
- ③15世紀以降、「history」は過去に実際起こった出来事の記述を表す方向へ向かい、「story」は過去の出来事に関するそれほど形式に縛られない記述、および想像上の出来事についての記述に関わる意味領域へと向かった。

Historicism(歴史主義)の3つの意味

- ①過去の事実に依拠して、現在の出来事の先例をたどっていく研究方法という比較的中立的な定義
- ②変化しうるものとしての条件や背景をあえて強調し、個々の出来事はすべて、そういった条件や背景を通して解釈しなければならないとするもの
- ③上の意見に反対する立場からの意味で、「歴史の必然」やあらゆるものに当てはまる「歴史発展の法則」の発見によって成り立つ解釈や予見に対して反対する立場。

『歴史とはなにか』

E.H.Carr『歴史とはなにか』岩波新書、1962年

歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不斷の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります。

歴史の機能は、過去と現在との相互関係を通して両者を更に深く理解させようとする点にあります。…過去は、現在の光を照らして初めて私たちに理解出来るものでありますし、過去の光に照らして初めて私たちの現在をよく理解することが出来るものであります。人間の過去の社会を理解させ、現在の社会に対する人間の支配力を増大させるのは、こうした歴史の二重機能にほかなりません。

- ①「歴史が始まるのは、人間が時の流れを四季の循環や人間の一生のような自然の過程と考えるのではなく、**人が意識的に関わって影響を与えること**のできる具体的な事件の連続と考え始める時なのです。」

②「すべての歴史は現代史である」(クローチエ、1866-1952)

歴史というのは現在の眼を通して、現在の問題に照らして過去を見るところに成り立つものであり、歴史家の主たる仕事は記録することではなく、評価することである、歴史家が評価しないとしたら、どうして彼は何が記録に値するかを知り得るのか、というのです。

③歴史は「決して事実ではなく、受け容れられた判断の連鎖である」(バラクルー)、「歴史とは、ある時代が多の時代のうちで**注目に値すると考えたものの記録**」(ブルクハルト)であります。

④その例として取り上げている文章

シーザーがルビコンという小さな河を渡ったのが歴史上の事実であるというのは、歴史家が勝手に決定したことであって、これに反して、その以前にも以後にも何百万という人間がルビコンを渡ったのは一向に誰の関心も惹かないのです。

⑤歴史における時代区分について

歴史がいろいろの時代に区分されるというのは、**事実ではなく、必要な仮説**、あるいは、**思想の道具**であって、それが光を与える限りにおいて有効なもので、その有効性は解釈の如何によるものである。

⑥「歴史家は裁判官ではない」

歴史の物語をするという口実で、裁判官のように一方に向かって罪を問い合わせ、他方に向かって無罪を言い渡して騒ぎ廻り、これこそ歴史の使命であると考えている人たちは、…一般に歴史的感覚のないものと認められている。

⑦啓蒙時代の思想家たちは、明らかに衝突する二つの見方を信じておりました。彼らは自然の世界における人間の地位を認めようと努力し、そのために、歴史の法則は自然の法則と同じものと考えていました。…しかし、如何なる根拠があって、自然を進歩するものとして、あるゴールへ向って絶えず前進するものとして取扱うことが出来るでしょうか。

無数の事実(Facts)

歴史家

特定の観点

Historically significant event

(歴史的に意味のある; 重要な; 意義深い)出来事

史実(Historical Facts)

歴史家

特定の観点

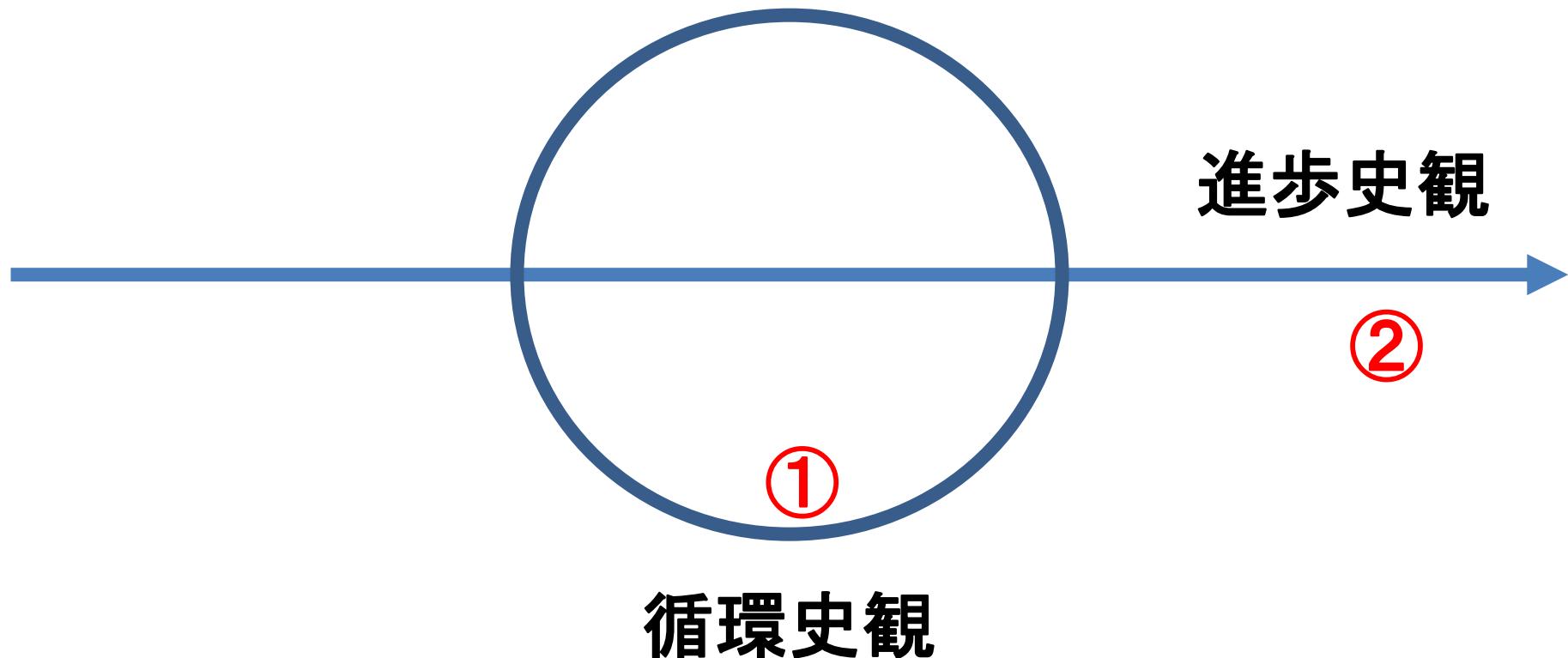
Interpretation(解釈、説明)

=歴史

時間の姿の深層構造

時間＝歴史

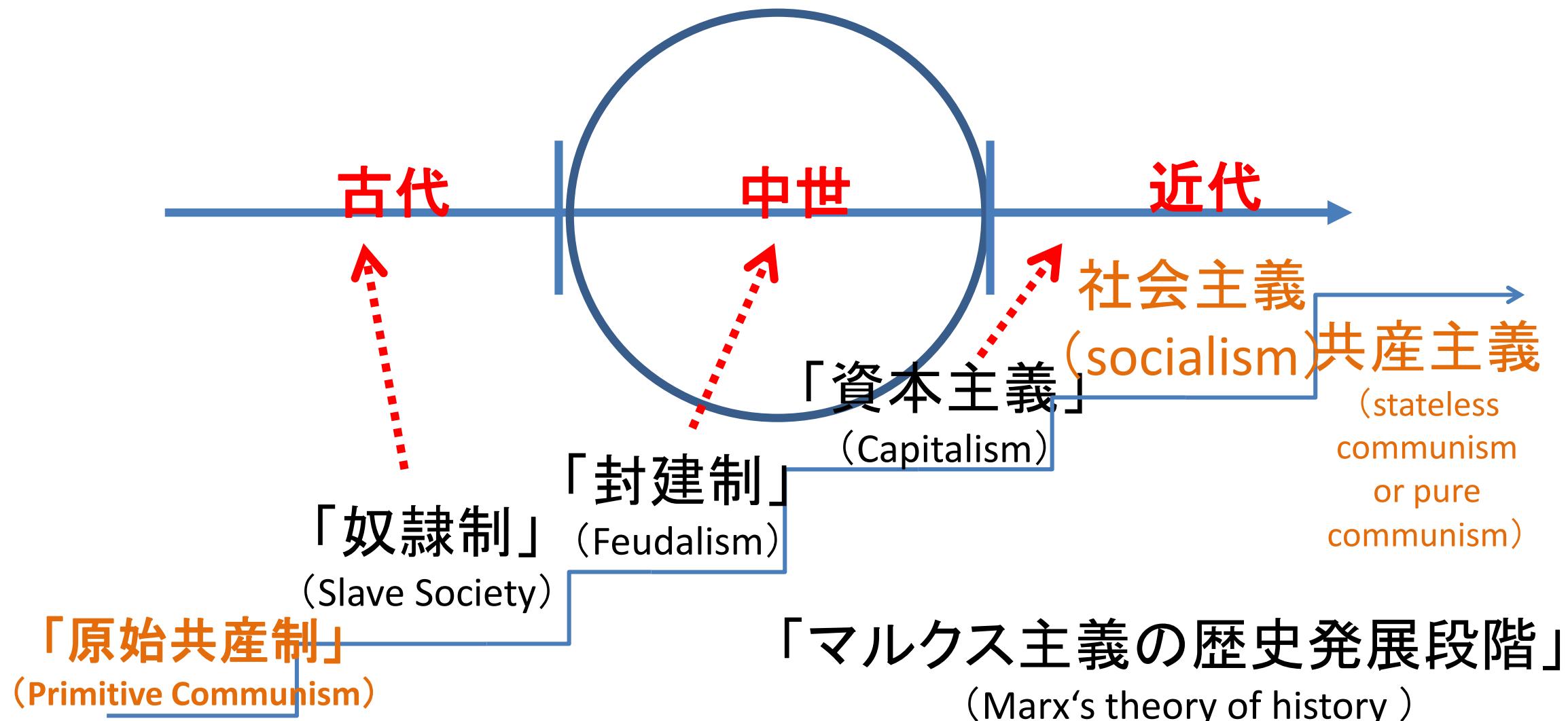
ある変化を認識する人間の認識枠



歴史の区分

人類の歴史上「封建制(feudalism)」の事例

- ①古代中国の「周」
- ②西洋近代
- ③日本の徳川幕藩体制



歴史的必然性(Historical Necessity)

歴史の専門家が、弁証法や時代精神、回帰といった代理神を使用しない場合には、かれらはパターンや形態を明らかにすることはできない。(ここでいう)パターンとは、歴史家が読者に切り売りするために歴史的史料に押しつけた形式である。それは物語の形式であって、「まずはじめに、それから、それから、それから」といった具合に、ある事実ないし一連の諸事実が、任意の出発点を選ぶところから始まり、現在に終わるか、別の任意の終点で終わるかして、時間の連續線上の余白を埋め尽くすまで続く。

…生に対する物語史家の使命は、読者のために人類の歴史の無限のデータの中から、少数の行為者、出来事、変化を選び出すこと、つまり、何が生じ、いかに生じ、なぜ生じたかといった明確な意味を付与すべく、物語の単一の時間枠のうちに固定されるべきものを選び出すことである。

Robert.A.Nisbet *A Philosophical Dictionary* 1982、『人間論の社会学的視圈—「命題」小辞典—』(安江孝司・小林修一訳、文化書房博文社、1988年)291～2頁。

「フォイエルバッハに関するテーゼ」(1845)

〈第1テーゼ〉

フォイエルバッハを含めたこれまでのすべての唯物論の主な欠陥は、対象・現実・感性が単なる客体の、または傍観者の形式のもとでだけとらえられていて、人間的な感性的活動・実践として、主体的にとらえられていないことである。ゆえに、能動的側面は、唯物論に対立して観念論によって展開されることになった。しかしただ抽象的に。…人間的活動そのものを**対象的活動(objective activity)**としてはとらえようとしない。(後略)

〈第11テーゼ〉

哲学者たちは、世界を様々に**解釈**してきただけである。肝心なのは、それを**変革**することである。

マルクスの描いた共産主義社会

マルクスは共産主義社会を分配の原則から低い段階と高い段階に区別し、低い段階では**「能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」**、高い段階では**「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」**という基準が実現するという見解を述べた(『ゴータ綱領批判』1875年)。

エンゲルスのマルクス評価

「マルクスこそ、歴史の運動の大法則をはじめて発見した人であった。この法則によれば、すべての歴史上の闘争は、政治、宗教、哲学、その他どんなイデオロギー的分野でおこなわれようと、実際には、社会階級の闘争の…表現に過ぎない。そしてこれらの階級の存在、したがってまた彼らのあいだでの衝突は、それ自体、彼らの経済状態の発展程度によって、彼らの生産、およびこの生産に条件づけられる交換の仕方によって、条件づけられているのである。この法則が歴史にたいしてもつ意義は、エネルギーの転化の法則が自然哲学にたいしてもつ意義にひとしい…」

(エンゲルス「カール・マルクスの著作『ルイ・ボナバルトのブリュメール一八日』第三版への序文」『マルクス・エンゲルス全集』第21巻、大月書店、1971年、254頁)

エンゲルスの評価は『共産党宣言』の次のような有名な指摘に照応する。

「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である。自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、同職組合の親方と職人、要するに、抑圧するものと抑圧されているものとは、つねに対立して、ときには隠れた、ときには公然たる闘争をたえまなくおこなってきた。そして、この闘争は、いつでも社会全体の革命的改造に終わるか、あるいは、あいたたかう階級の共倒れにおわった」

(マルクス・エンゲルス『共産党宣言』『マルクス・エンゲルス全集』第4巻、大月書店、1960年、476頁)、また『共産党宣言』大内兵衛・向坂逸郎訳岩波文庫、1951年も参照。

時代ごとの社会階級

- ①古代ローマ：貴族、騎士、平民、奴隸
- ②中世：封建貴族、家臣、ギルド商人、農奴
- ③「労働力のみの所有者、資本の所有者、そして土地の所有者は、それぞれ彼らの収入源が賃金、利潤、地代であり、彼らは賃金労働者、資本家、地主として資本主義の生産様式に基づく現代社会の3大階級を構成する」

マルクス主義に対するM.Weberの態度

われわれの考えるところでは、文化現象の総体が「物質的」利害の布置関連の所産ないしは関数として演繹できるとする、時代遅れの信仰からは自由に、社会現象と文化事象を、それが**どのように「経済によって制約され」、また「経済を制約する」のか**、という特定の観点から分析することは、実は実り豊かな創造性をそなえた科学上の原理であったし、慎重に適用して、独断に囚われさえしなければ、今後いつまでも、こうした原理でありつづけるであろう。**「世界觀」としての、あるいは、歴史的実在を因果的に適用する公分母としての、いわゆる「唯物史觀」は、断固拒否すべきである。**

マックス・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかる認識の「客觀性」』(富永祐治他訳・折原浩補訳、岩波文庫、1998、66頁)

マルクス主義に対するM.Weberの態度

社会的規範(上部構造)=観念(意識)

基礎的な利害(下部構造)=現実(存在)

人間の行為を直接に支配するものは、利害(物質的ならびに觀念的な)であって理念ではない。しかし、『理念』によってつくりだされた『世界像』は、きわめてしばしば転轍手として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミズムが人間の行為を押し進めてきたのである

マックス・ヴェーバー『宗教社会学論選』大塚久雄、生松敬三訳、みすず書房、1972、58頁。

このように、M.Weberの場合、規範も利害も常に決定的な役割を演じるものとしてはみなしていない。(⇒選択的親和性)

「社会学」の知的伝統のなかでは、人間の歴史を**類型的に異質な「三つの時代」を基本的に形成**し、また経由してきたとされる。

- ①コントによって提起された時代の類型に沿っていえば、人間の「神学的段階」ないし「宗教の時代」が歴史的に、きわめて長く続いた。（「形而上学的段階」ないし「理性の哲学の時代」の創生が、大体17世紀であるとされていることから逆算すれば、この段階が以下に長かったかがわかる）
- ②人類として地球上のあらゆる民族がすべてこの時代を体験して形成し、そして構成してきた。（ただし、宗教の時代が諸民族に共通した体験であるとはいえ、各民族における「宗教体験」の形態と内容がまったく異なっていることを見過ごしてはならない）
- ③人間がこれらの宗教に「従つて(subjective)」、すなわち「主体的(subjective)」に生きた時代がそれぞれ共通に存在していた。…人類史が「宗教の時代」を突破して、何か新しい時代を開く可能性は極めて低かったかもしれない。

「歴史への関心」は「いかにいきるか(べきか)」の問いの下に、人々がそれぞれの価値関心からさまざまな歴史観をもち、それにふさわしい歴史の評価に向かおうとする。

この「関心」の違いが「観点」の相違を生み、そして、それぞれの観点から何ほどか整理された主張が、いわゆる「イデオロギー」とか「思想」を形づくり、ひいては「学問」とか「科学」と呼ばれる体系的な「知の世界」を培っていくことになるのである。

(安江孝司『社会学』法政大学通信教育部、1983年、8頁)

「三つの歴史区分」

	社会変動論		
A.Comte	神学的段階	形而上学的段階	実証的段階
	軍事的組織	法律的組織	産業的組織
K.Marx	奴隸制	封建制	資本制
D. Riesman	伝統指向	内面指向	他者指向
M.Weber	合理化の過程		



実証 = 観察・実験・比較



この時代の変化過程に古代と近代(現代)を繋いだ原理がある。その意味で、今現代の変化を捉えるためにも、その原点である「中世」の歴史を振り返る必要があるだろう。

David Riesmanによる人間の性格類型

伝統指向型 (tradition-directed type)

「過去の伝統と同じように行動する」・「昨日と同じような明日が来る」というように、集団に所属することによって保証される同調性であり、個人は集団の伝統に適応し、儀礼や習慣にもとづいて行動する。この型の社会は、人々が変化や進歩を指向しない社会であり、人口増加を伴わない高度成長潜在的な段階の社会である。

内部指向型 (inner-directed type)

「第1の革命は、ルネッサンスと宗教改革以来の変化によって、人々が伝統的な生活様式から切り離されてゆく革命であり、「伝統指向型」から「内部指向型」への転換である。・・・17世紀以降、西欧社会では内部指向への転換が起こり、工業化によって生産の拡大が続き、人口が急増する過渡期的成长の段階をむかえた。内部指向とは、幼少年期に内面化された目標によつ・・・て保証される同調性であり、個人はその目標を心理的な羅針盤として、伝統に依存することなく新しい生活のフロンティアに向かって挑戦を続けるのである」

他人指向型 (other-directed type)

「第1の革命が終わり、第2の革命によって出現しつつある「他人指向型」の人間と社会である。西欧では17世紀以来の急激な人口増加の時期が終わり、低出生率による初期的人口減退期をむかえた。この第3の段階において、個人の同調性は内面化された目標によってではなく、レーダーのように外部からの信号を受信する能力、他人に対する敏感な感受性によって保証される。この型の社会において、人々はなによりも仲間集団への同調を基準とし、マス・メディアの影響を感受しつつ、生産ではなく消費と人間関係の新しいフロンティアへと向かうのである」

まとめ

「近代」とは何か

「近代性(modernity)」に関する最低限の定義

「近代」とは何か

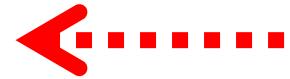
「近代」という時代は、ひとつのまとまりのある歴史的経験として理解するとき、それはなによりも西欧において出現した。その西欧において、近代が近代として自覚されるにはかなりの年月を必要とした。

一般的な意味での「近代」
フランス革命から現在に至
るまでのおよそ200年間

この200年を作り出すまでの
200年くらいの準備期間

ルネサンス時代
(一般的には近代の曙)

15~16世紀のほぼ200年間は、古い
時代の残存と新しい時代の芽生え
が共存する過程であり、新旧の闘争
と対立が激烈に進行していた時代



宗教改革と宗教戦争
封建時代の終焉の時代
であり、同時に近代とい
う時代への助走期間

「近代性(modernity)」に関する最低限の定義

17・8世紀西ヨーロッパで始まった西歐的制度と意識が
全世界的に拡散したもの

①時期 ②空間的拡大

③核心的内容

個人主義、合理主義、啓蒙主義、理性主義
などを基盤に作られた制度と文化

新しいが不自然な近代

「近代」と呼ばれる時代は、要するにきわめて特殊な時代である。人類史のスケールからすれば、長く続いた近代以前の「宗教の時代」が、むしろ自然で、当たり前な「人間の世界」であったと言えなくもないからである。

宗教時代に比べれば、**近代は(人工的)で、その意味で(不自然)である。**